評論

シェークスピアの波紋
―藤田鳴鶴と佐藤鶴谷との確執―

東京　御手洗一而

明治文化は、よく翻訳文化といわれる。無理もないことである。三百年の鎖国から一ぺんに解放されて、外国から入ってくるもの、見るものの聞くものがすべて新しいものばかりである。幕末のうっぷんが維新を通して、新知識の吸収に集中したこの時代に生きてみたかったものである。青年は、外国からやってくる文化文明にあきたらず、外国語を修得して国外に飛び出し、あらゆる分野に外来ものを紹介して変革を遂げてゆく。そして全国伝播の役目をしたのが翻訳の価値である。明治十四、五年頃、流行の先端をゆく各新聞社が、競って紹介の労をとったのもうなずけることである。

明治十六年三月から六月にわたり、四回に分けて、「報知新聞」に、「春宵夜話」として、シェークスピアの紹介文が記載された。ところが、訳者翠嵐生が、社外からの投稿の形をとったので、筆者が誰だか分らなかったらしい。これだけ書くと、史談会の諸兄ははんと納得されるかもしれない。翠嵐生とは、藤田茂吉、名は禎、字は子基、鳴鶴・九泉外史・聞天楼主人と号す。「文明東漸史」「済民偉業録」を著わした郷土の大先達である。

こう書けば簡単であるが、明治文学研究の第一人者であられた柳田泉先生（故人）は、この翠嵐生を究明するのに随分苦労されている。四回目の「ハムレット」の記載から「春宵夜話」が「春宵閑話」に変り、新聞記載の一部を刊本とした「麻吉侯情話」には、翠嵐生が翠嵐先生となっていた。それから一年後、明治十七年十二月から翌年八月までに、再び四回の記載が始まる。

「花間の一夢」―「シンペリン」
「落花の夕暮」―「ロミオとジュリエット」
「栄枯の夢」―「マクベス」
「雨後の花」―「末よければ凡てよし」

以上の翻訳紹介の署名に、九泉生、あるいは九泉山史とあった。

さて柳田博士は、この第一回の記載である「花間の一夢」の序文に、

「余往キニ撒斯比亜ノ稗史ヲ抄録セル一書ヲヨリ、最モ邦人ノ耳目ニ入リ易キ小話ヲ訳述シ、之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ掲ゲ云々」

とあるのを見出して、翠嵐生と九泉生が同一人物である正体を見付けて喜んだとある。私は、幾つかの名前を使い分けた先輩、またそれを研究する先学者の苦労に感心させられた。

ここで少し余談になるが、鳴鶴藤田茂吉の号名について、博士の説明をお借りして付記しておきたい。鳴鶴という号は、詩経小雅鳴鶴篇から出たもので、「鳴鶴九泉、其声聞于九天」というところから、鳴鶴と号し、九泉を別号とし、書楼を聞天楼と号したとある。

現代の我々にとって、先哲の本名・字（あざな）・号などは、全くわずらわしいが、これらの名前の使い分けによって、

各分野の書きものを区別しているのを調べるのも興味深いものである。そして、鶴鳴・鳴鶴の鶴が、何となく郷里の鶴城の鶴とつながりがあるようで、ほっとさせられる。

人間藤田鳴鶴を知るには、鳴鶴の死を悼む後輩犬養毅の弔辞に要約されている。青年期の苦学から新聞界入り、やがて改進党の大立物から政界入り、晩年実業界にも手腕を見せるが、文学方面で「済民偉業録」だけでなく、シェークスピアの紹介者としての一面があったことも忘れてはならない。四教堂の伝統を汲む文学の血脈が感ぜられる。

これだけでは、題した「シェークスピアの波紋にならない。当時もう一人の先達、佐藤鶴谷はどうしていただろうか。鶴谷は、明治十四年に帰郷中の矢野龍渓に伴われて上京し、報知新聞社の記者になっている。市史によると、

記者になった鶴谷は、社長矢野龍渓の直属として、彼らに伍して行くつもりであったが、外勤にまわされた鶴谷の席は、彼らの上司に対して下司であり、田舎書生のカラの抜けない鶴谷は不平満々、先輩記者と宵和しなかった。そのころ矢野龍渓は「経国美談」の編著を思い立ったが、これに鶴谷は一役を買った。

とある。

後日、鶴谷はまた「世路日記」を著し、全国的に著名になるが、この「世路日記」後の小説をしらべていた柳田博士は、明治十六年九月刊行の「野路の若鹿」という草双紙風続き物戯作の巻末広告で、菊亭香水著「花月情史」の本名を見出し、当時依伯に帰っていた佐藤蔵太郎氏に、その刊行について照会したそうである。その返書の中に「それは花月情話というものであろう。それはシェークスピアの小説の翻訳で、静岡の新聞に出たが、訳があって中絶したので完成していない」云々であったという。

後年になって、博士は、静岡の「函右日報」や他の用字で調べているうちに、この「花月情話」にぱったり出会ったのである。柳田博士は、この時のことを次のように書いている。

「嬉しいというよりも、むしろ有難かったといいたい。多年この一事に思い悩むのを自分の用事にしていた頭脳細胞の幾部分が、この発見で他の仕事に向けられるようになったかと思うと、実にほっとしたわけである。」

と。

一つの事を何年も調べていると、思わぬ時に全く同じ思いをさせられることがある。

さてこの地方新聞は、明治十二年六月の創刊後、十七年一月から「郵便報知新聞」と連絡をとって、矢野龍渓の意見を入れたり、改進党臭味を発揮した小型政治新聞になった関係から、当時報知記者の鶴谷が寄稿するに至ったらしい。

この「花月情話」は、明治十七年二月九日「函右日報」一四〇号から第一回「風動花枝探月影天開月鏡照花妖」として掲載され、二月廿一日第六回で中絶している。署名は「在東京　菊亭香水訳」とあり、勿論「ロミオとジュリエット」の大要を小説風に直したものである。そして、この原話は、語学力のあった矢野文雄の弟小栗貞雄氏から聞いて書いたものだとの返事があったと記されている。

ところが、この中止の理由が問題である。菊亭氏が病気のため、全快まで一旦中絶すると、日報の二月二十六

日付に発表されたが、これは単なる口実であった。鶴谷から博士の返書にあった「訳があって中絶した」のである。この訳が、報知新聞における二人の問題であった。

前記したように、鳴鶴は、明治十六年からシェークスピアの紹介に、大へんな情熱を傾けていた。片方で民権論の論説をはきながら、片方では文学や演劇にも一方ならぬ傾倒を示し、新たな紹介を着々と準備していた。その矢先に、鶴谷が明治十七年二月、地方新聞でこの計画をすっぱ抜いた形になったので、鳴鶴は鶴谷に中心を申し入れたのがその真相である。鶴谷は先輩に対して譲歩し、病気を理由にやむなく中止したのである。鳴鶴が明治十八年に「落花の夕暮」として、報知紙上に紹介したのがそれである。

私はこの事情を知って、複雑な気持ちになった。共に郷土の大先輩である。鳴鶴はすでに前年から計画を進めており、鶴谷は語学力に一歩を譲っても、地方絶価を高からしめんとして努力しながら、二人が相反する結果になったのである。並び立つ容認の方法はなかったものだろうか。当時の流行に対して、ハイカラ文士や記者の気負い立った競争心が、身近な郷土の先輩達の事だけに、胸を打たれる思いである。そして鶴谷が中止してから一か月後、明治十七年四月に龍渓は政州へ渡航する。その後鶴谷は東京をはなれたが、鶴谷が東京を去る理由は、こんなところにも嫌気がさしたのではないかと思う。余りにも両先輩が、市史にいう佐伯人気質の特色を持ち合わせているのにがく然とする。

鳴鶴には、大養に対するようないたわりが欲しかったし、鶴谷には、順応性の中に一つの障害の打破を望みたかった。鳴鶴が、社外寄稿の形をとり容認出来なかったものか、鶴谷の気性が潔しとしなかったものか、青年期の実力主義やプライドが、両人にそれを許さなかったのであろうか。

私は、鶴谷にもう少し順応性を要求して、「世路日記」の次の作品を読ませて貰いたかった。先年帰郷の時、市史編集室で、初版の「世路日記」（この一冊については、高知在住の横川先生の手紙から羽柴先生につながる、私にはなつかしい思い出がある）に続くものを探したが、見るべきものはなかった。すでに郷土史の研究に没頭されたのであろう。しかし、鶴谷外史著述編纂書目の中に、「禽獣会議・人類攻撃、その一節・東雲の烏鴉」と題するのがあった。なお入念に探していると、この一篇について、柴田南華識とするこの手稿の註釈書があった。題名に示す通り、科学・文明に対する皮肉、今日の人類問題に対する警告のようなものであったと記憶している。自然の破壊、公害の原凶である人類の横暴が、禽獣の民主主義会議の決裁によって攻撃されるとは、なんと痛快な卓見ではないか。この発想、見識があればこそ、やはり中央でもう少し頑張って欲しかったと願うのは、私一人ではあるまいと思う。

明治十六、七年頃、郷土の大先輩二人に、こんないきさつがあったのであるが、今更、シェークスピアを恨んでもしかたがない。とんだところに、シェークスピアの波紋があったのである。

（おわり）

二月八日（日曜）直川村史談会山下貞男新会長以下八名の方々を迎え、本会羽柴以下八名、一しょになって再度拝年礼に登る。下って、古市の居館跡や十三重の塔など一しょにしらべ、龍護寺に立寄ったら、北川町の前町長中井平一郎氏も来ておられて、にぎやかな親睦史談会をつづける。楽しくまた良い勉強の出来た、よい一日であった。